

80年代のオーストリア

東方の国 — Österreich

I A E A 査察部長 村上 憲治

日本人会50周年の実はその半分近くをウィーンで生活した我々にとって当時を振り返るとその変化、発展は随分大きく感じる。80年代初めのオーストリアは Österreich (東方の国) の名前通り西欧と言うより東欧の社会主義国家の感が強く、ウィーンの街並も今の様に明るくなく、暗く陰気な感じで「第3の男」を想像させる街角も見られた。政治的にはスイスの様に中立国として東西の接点で、多くの日本企業がウィーンに拠点を置き東欧との懸け橋の役割を担っていた。ただ国際都市かというと必ずしもそうではなく、ドイツ語以外には英語、フランス語等は街ではほとんど通じなかったし、英字新聞(ヘラルドトリビューン)は1日以上遅れて手に入り、日本の新聞は3日以上掛かった。そんな時、日本からのニュースは短波のラジオジャパンを聞いて情報交換したのが懐かしい。最も仕事の面でも情報量の面でも当時それほど不便とは感じなかったのも事実だ。日常の生活はしかし今に比べると随分不便だった。スーパーが少ししか出来てなく、パン屋、八百屋、肉屋と一軒ずつ買物して歩き、また週日は12時から3時まで Mittagspause で休み。夕方も6時にはほとんどの店が閉まってしまい、土曜日でも午前中だけが買物可能で、子供が小さかったのでミルク、パン、卵など欠かさない様にいつも開店時間を気にしながら生活していたのを覚えている。

オーストリアに生活して印象に残る大きな出来事が2つある。1つは旧ソ連及び東欧圏の崩壊だ。それまで鉄のカーテンだった国境が突然開かれ、ハンガリー、チェコスロバキア(当時)から東欧圏の人々が流れ込み一般市民にとっては歓迎と当惑の入り交じった感がありウィーン市内でもその混乱が感じられた。ソ連の崩壊によりオーストリアの政治的中立国が経済的にも少しづつEU寄りになり、1995年のEU加盟も忘れられない経験だ。1994年6月の国民投票で66%の賛成で加盟を決めるまで国内的には経済的恩恵を取るか中立性の維持かの長期に渡る議論は興味深かった。実際には加盟後、経済的には生活が楽になったとは感じなかったし、加盟後の世論調査で加盟賛成の人は40%もいなかったのは印象的だった。現在のEUの拡大からすると以外な気がするが当時の政治の不安定な状況からすると大きな出来事だった。

当時を振り返ると色々不便不都合な面もあったがウィーンはそれを越えて十分満足いくものが音楽、芸術、自然、生活の上であったというのが長期に滞在した我々の実感だ。

<村上 憲治>

1982年10月から滞在。妻、子供2人(息子と娘)とウィーンに暮らす。I A E Aで核査察の責任者として一筋。